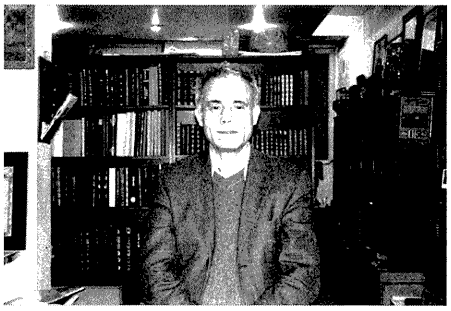
❖ 民族のこころ(153) ❖

# 文化的仲介者としての日本



Abdelaziz Ghozzi 氏

小田 淳一

ゴッツィ氏はモンパルナス大通りに面した古書店の店主で，チュニジア人の彼が店を開いたのは1984年である。17世紀の東洋学者アントワーヌ・ガランが大使付通訳としてトルコに滞在した時の日記について，7年前にメールをやり取りしたのがきっかけで彼と知り合い，その後当地を訪れる度に時間があれば挨拶に行き，時々古書を購入する。彼は川端康成や三島由紀夫，それに小津安二郎のファンでもある。

最近の12年間，彼は千一夜物語のフランス語版（ガランによる1704年の訳がその嚆矢である）を中心に，関連する研究書や雑誌論文などを蒐集し，ゴッツィ版「千一夜コレクション」の完成に全力を傾けて来た。コレクションの中には，子供向け絵本，情景のテクストが入った色付きガラス絵，立体細工の玩具類，更には映画・演劇のポスター約20種なども含まれており，彼の概算では全部で約300タイトル1000冊になる（2007年10月頃にはカタログが出来上がるとのことである）。

何故「フランス語」の『千一夜物語』なのかを彼に尋ねたところ，少し真面目な顔になって語り始めた。「フランスにおけるオリエンタリスムは，約3世紀に亘って千一夜物語の大きな影響を受けており，言わば千一夜物語がオリエンタリスムの基層を成していると言える。自分のコレクションはその基層を《実体化》するもので，またカタログはその体系化された《痕跡》となる。勿論，商売ということもあるが，まずは学問に貢献することが最大の目的である。もう一つの動機は，ガランの人間性に魅了されたということだろう。ガラン版『千一夜物語』は，或る研究書のタイトルにもあるように，哲学的な意味において《見えざる傑作》なのだ。」

肝心の価格であるが，ばら売りはせず，セットで25万ユーロ（約4000万円）程度を考えているそうである。オイルマネーで潤う某国の国立図書館から既にオファーがあったらしいが，主なものだけを陳列して残りはすべて保管してお仕舞，というそこのやり方が彼には気に入らないらしく，日本のどこかの研究機関に是非購入して欲しいと最後に言われた（フランスの研究機関に売るつもりがない理由については教えてくれなかった）。

2006年10月に最新のフランス語訳『千一夜物語』全3巻の最終巻がガリマール社のプレイアッド叢書から刊行され，このシリーズはゴッツィ・コレクションの最後を飾ることになった。そこに，ガランが用いた写本についての論考を書いた元国立科学研究センター研究員のシロンヴァル女史は，ゴッツィ氏よりも古い筆者の知り合いであるが，両人はお互いの名前を知りながら，不思議なことにこれまで一度も顔を合わせたことがなかった。彼女がクロード・ブレモンの指導の下で書いた千一夜物語モティーフ索引の日本語訳に関する打ち合わせの後，折角の機会なので，時間があれば彼の店を訪ねてはどうかと持ちかけると，是非行きたいとのことで，或る意味で「歴史的な」会見はあっさりと実現した。彼らは旧知の友のように話題に尽きることなく，閉店時間を過ぎても，挿絵入りの幾つかの版について長々と話を続けていた。

ゴッツィ氏の店に行く時には，女性の研究者に同行してもらうと時折眼福に与る機会が訪れる。彼は，含羞にも似た笑みを浮かべながら，階下の書庫や奥の本棚から，この上なく素晴らしい挿絵付きの稀少版を持ち出して来て見せてくれるのである。